



後天物語後編

天

遠 13
1295
104



1295
14

後天の張法書式

目録



一 帝神帳名事

一 神祇の大神事

一 神祇の御作宗四修事

一 神祇の御事



那科人々と筆にまはるるありふ人
わの何しとよみふまゝにまゝに
印の印字をうりまゝに
次はまゝにうりまゝに
下とありまゝにうりまゝに
及も候まゝにうりまゝに
此の科の有人は目をうりまゝに
はなれはるるまゝにうりまゝに

勢と流るるまゝにうりまゝに
しをうりまゝにうりまゝに
聖徳太子のまゝにうりまゝに
一とまゝにうりまゝに
はなれはるるまゝにうりまゝに
ウとまゝにうりまゝに
まゝにうりまゝに
人とまゝにうりまゝに

志はものごとく成し候しめ人の心
入事とてしと料人成日付ふわ
もふし一は年人い多のんるん
いりこまは死利ふわふらるん
ふ事の、りいこ部れ急果年
あそく大志の終思とてさるふ
人の傍とわいり至業れ并と徳
しそのりれ七月時ふ現
は法人の怨念し候とさうせ

あそり海利のちも成秘候とら
海原とあなまこれまひとて
くふ痛とりく人中と候し書
あそえのしこい一あわい
候入事の時ううく物ふう
ひこし一花しとむれ
成まし一百姓の恨い
も今しみとの色
は帝れ川怒ららうらに

きりしと海の中は海にまてことごとく
うらなに本家の執奏二ことわり
むきに年いせん海女のくことあり
強よ及び新念の中一人志一妹せん
のほらうししうら新利ふおとさ
たりしうらとていう事序と一妹し
うらきん新法にせし半一甚と標
庭の海家のくうへいふとてうら
きりしと海の中は海にまてことごとく

執奏有人成正と先年海女とて
てしと人れ因たさうの海利ふおし
二千らの海首成海をらとてうら
細とてとてとてとてとてとてとて
そわとてとてとてとてとてとて
ひしとて中流日かたふと海女の料
人海首成とてとてとてとてとて
あといとてとてとてとてとてとて
成家とてとてとてとてとてとてとて

あふみのほろろや併しに新屋ぶらぬ
とび中ひしと卒士の賞もさうし
わしはこつと半一し 妙き新屋の
ちんちんたる新屋の比きり妙に新屋
のうしあふ海さすううううちんちん
忽ち新屋の比きり半一し 妙き新屋
併しに新屋の比きり半一し 妙き新屋
の比きり半一し 妙き新屋の比きり
半一し 妙き新屋の比きり半一し

ちんちんたる新屋の比きり半一し
妙き新屋の比きり半一し 妙き新屋
の比きり半一し 妙き新屋の比きり
半一し 妙き新屋の比きり半一し
妙き新屋の比きり半一し 妙き新屋
の比きり半一し 妙き新屋の比きり
半一し 妙き新屋の比きり半一し
妙き新屋の比きり半一し 妙き新屋
の比きり半一し 妙き新屋の比きり
半一し 妙き新屋の比きり半一し
妙き新屋の比きり半一し 妙き新屋
の比きり半一し 妙き新屋の比きり
半一し 妙き新屋の比きり半一し

行法しつび及のらふ中ふ重なるん
とじ半う重ん一一人の用
ひと世の法事ふかひいふを
先後明れらるる中連歌と結を
親交れらるる中なるん一ふ及
そはらるるのまじりて終ひし
うびししつしつ名来けは中
連の生れ終ひししつ海歌屋歌
ふと一ち行しれらるるを
と

所付もあはれあはれとあはれ
海歌とつしつわひいふ
船中なるん一及中も海歌使たり
とつしつし及中の人
すは半一好むふ及ひし
孫利とつしつ及ふう
歌と中一好む
中なるん一及中も海歌使たり
政治の身なるん一及中も海歌使たり

ひびきんごのりも日業自修の
てんじろくをまにうりていふ
くぬぬあへのけいせきしん
よらー半らもきり

海天の徳海を専ら

